阿毘達磨に於ける触処論

野々目　了

従来、南伝阿毘達磨の色法を考察する際の問題点の一つとして、「水界と触処の関係」が指摘されてきた。というのは、有部が四大種を全て触処に摂するのに対して、セイロン上座部では水界を触処から除くからである。しかも、セイロン上座部が何故そのような立場を取つたのかという論理的説明になると、学界においても未だ明らかにされていないようである。この問題と取り組むにあたつて最も困難なことは、セイロン上座部の数多くの論書が、全て口を閉ざしたようにこの問題には触れないということであつた。

ところが、Abhidhammattha-saṅgaha の ṭīkā なる Abhidhammattha-vibhāvanī の中に、この問題について、セイロン上座部としての見解を論理的に述べている箇所がある。[1] 年代的に後期の論書であるとはいえ、セイロン上座部の伝統的な見解であり、且つ、如上の問題に対する具体的回答であると考える。

さて、Abhidhammattha-vibhāvanī では、まず

「水界の微細なる状態によつて、触ることが不可能であるが故に、『水界を除ける三大種と称せらるる（触、云々）』と（説かれたのである）[2]」

と述べている。この説明は、「水界を触処から除く理由」としては第二義的なものであつて、最初からこの理由によつて水界を触処から除いたとは考え難い。むしろ、セイロン上座部ではこれとは別の根拠から水界は触によつて得られないと考え、その理由として「水界は微細なる状態の故に」と考えたと思われる。重要な点は、これに続いて述べられる文章である。曰く

「たとえ冷たさが触つて得られたとしても、それは即ち火界である。鈍い暑さの時に冷たさと称されるのは、何らかの徳性の不足の故である。それらは、冷たいという覚の確立せざる状態から知られるのであり、こちら岸と向こう岸の如し。[3]（それは、次の）如くであつて、炎暑時に立つていて影に入った為に冷たさの覚があり、そこで長時間立てる為に暑さの覚がある。若し水界が冷たさであるならば、暑い状態と共に一方の聚では（冷たさが）得らるべきであるのに、そのようなことが得られず、それ故に水界は冷たさではないことが知られる。[4]」

このセイロン上座部の説は、要するに「冷たさ」というものが相対的なものであつて、何ら一定の基準によつて定められたものではないとし、「冷たさ」として我々が触るものは所詮、水中の火界にすぎないとするのである。即ち「冷たさ」とは、火界の少ない状態を言うのであるが、「冷たさ」は単にそれのみによつて定まるものではなく、仮令同一温度の水であつても、我々の身体の状態によつて、「冷」とも「暖」ともなり得るから、「冷たさ」が相対的なものであると主張し、「水界は冷たさではない」と反論しているのである。

それでは、何故セイロン上座部ではこのように「水界は冷たさではない」と強調し、反論しなければならなかつたのであろうか。このあたりに、問題を解く手がかりがあるように思われる。セイロン

上座部の論書に於て、このように「水界は冷たさではない」と主張しているということは、逆に「水界は冷たさである」と主張した部派があった為であろうということは容易に想像できることである。そして、その部派としてまず第一に考えられるのが、触処に関してセイロン上座部とは見解を異にする有部である。そこで、有部の論書の中にそのような事柄を述べている箇所を捜してみると、倶舎論に曰く

「水に於ける冷たさという特質によって（火）の温かさも解ると、他の人々は言う。しかし、（他のものと）あい雑っていなくても冷たさという（水の）特質は存在するであろう。声や受に（それ自体の）特質がある如くである。[4]」

この倶舎論の所説を Yaśomitra の註釈を参考に解釈すれば、経部の先駆者と伝えられる Śrīlāta が「水の冷性に強弱があることによって、そこに少量の暖性の強弱、即ち火界の存在がわかる」と説くのに対して、「冷たさとは、水界本来の特質であり、冷性の強弱は火界と水界とが相雑っていなくてもあり得るであろう」と、世親が反駁しているのである。この点から見ると、「有部では『水界は冷たさである』と考えていた」と言い得るのであり、前掲のセイロン上座部の反論は有部のこのような考えを念頭においてなされたものではないかと思われる。しかしながら、順正理論に於て

「彼冷触水風界増四大果。故是所造色[5]」

と説かれる如く、有部の教学では「冷」は水界と風界の所造の色であるとするのが建前である。この点からすれば、「有部では『水界は冷たさである』と考えていた」と、直ちに断定することは出来ないが、例えば、順正理論に曰く

「又上座言。火界或少或不二増強一即名為レ冷。所以者何。於レ彼無二日或去レ日遠便有レ冷故。又如下極大炎熱起時無二別少分所造触起一同許丙唯有乙火大増多甲熱減少時亦応下如是無甲別少分所造触生上応レ許二唯是火大減少一。若別有レ冷亦応レ許レ有二別所造触非煖非冷一。是故定無二冷所造触[6]一。」

ここに示された上座の説は一見して明らかなように、先に示したセイロン上座部や経部の所説と内容的に同一のものであることがわかる。（だからといって、ここで説かれる上座が直ちにセイロン上座部や経部を指すと断定は出来ない。）そして、この上座の説に対して、衆賢は有部の立場から反論を述べるこのことからして、前掲の「水界は冷たさではない」というセイロン上座部の反論が、有部等の所説に対してなされたものであると考えてよいと思われる。

最後に、無畏山寺派について一言しておきたい。大正大蔵経に収められている解脱道論を見ると、水界を触処の中へ入れているかの如く理解される。[7] けれども、蔵経中の脚註に示された異本は、水界を触処から除いている。無畏山寺派では、異本の示すように水界を触処から除くのが正しい教理である。念のため注意しておきたい。

1　十二世紀後半の著作。

2　Abhidhammattha-vibhāvanī, Varanasi, 1965, p. 159.

3　「相対的なものである」という比喩。

4　Abhidharma-Kośabhāṣya, edited by Pradhan, Patna, 1967, p. 53.

5　大正二十九・三五六・a。

6　大正二十九・三五四・b。

7　大正三十二・四四九・a。